

Hermann, J. Weber : Die Lehre v.d. Auferstehung
d. Toten in d. Haupttraktaten d. scholastischen
Theologie v. Alexander v. Hales
zu Duns Skotus

(Freiburger theologische Studien, Bd. XCI, 1973, Herder)

野 町 啓

本書は、もともと1971年 Regensburg 大学に Dissertation として提出されたものであって、全体は、I. Quellenlage; II. Problemgeschichtliches zur Auferstehungslehre; III. Inhaltliche Darstellung d. hochscholastischen Auferstehungslehre の三部からなる。そしてさらに、従来未公開であった Petrus de Trabibus, Augustinus Triumphus v. Ancona, Wilhelm v. Ware, Eustachius v. Arras, Petrus v. Auvergne, Johannes Quidort v. Paris, Walter v. Brügge, Jakob v. Metz の Sententiae (ことにその IV. d. 43.44.47.49) 註解, Traktatus, Quodlibet 等の関連テキストの抜粋を収録した Anhang が資料として加えられており、これが本書の一つの刮目すべき部分でもある。本書の中心は、すでにタイトルそのものからうかがえるようにその第Ⅲ部にあるといえるが、それは Anthropologischer Fragekreis; Christologischer Fragekreis の二章、ならびに Zusammenfassung angesichts heutiger eschatologischer Problematik と題された Schluß からなっており、同部のこのような構成自体に本書全体をつらぬく著者の方法論的態度と関心とが端的に現われているように思われる。すなわち著者は、Anthropologie, Christologie ならびに Eschatologie の三つの軸を立て、Hochscholastik においてこれらがいかに相互に関連していたのか、その過程を、ことに前二者を究極的に Eschatologie へと収斂させつつ、アリストテレスの受用が及ぼした影響をそこに交叉させながら、当代における夥しい量の Sententiae 註解, Quaestiones, Summa等の資料を駆使して歴史的に明らかにしようとしているのである。本書は、このように Hochscholastik における Eschatologie の Gesamtdarstellung を一面において企図しており、個々の神学者、問題点をめぐってのモノグラフは別として類書を欠く現在、本書の意義はきわめて高いといえる。その際著

者の念頭には、同種の試みを Frühscholastik についてなした Heinzmann の業績 (Die Unsterblichkeit d. Seele u. die Auferstehung d. Leibes, 1965) があり、直接にはその批判的継承として本書は書かれているといえる (Heinzmann は本書の随所において言及されているが、例えば Hugo v. St. Viktor—cf. SS. 128 sqq.—, Wilhelm v. Auxerre—cf. S. 134—等の Platonismus との関連からする位置づけをめぐって、批判修正が試みられている)。博引旁証に富み410頁にわたるこのような浩瀚な著書の全容にふれ、かつ適切な批評を試みることは至難であり筆者の手に余るので、ここでは筆者の関心から第三部第一章を中心に若干の問題点を剔出してみることにした。

同章はたしかに本書の要といえるが、以下においてふれるように、著者の究極の意図は単に歴史的な Darstellung にあるのではなく、それを通して著者のいう、 heutige protestantische Theologen の復活に対する問題意識を批判しようとするにありと考えられ、本章のみを議論の的とすることは、一面において著者の神学上の観点にもとる可能性のあることはいなめない。しかし本書を単に神学の枠内にとどめてのみみるのでは十分でなく、それ、ひいては著者の意図自体を越えた意義をとりわけ本章は持っているように筆者には思われる。なぜならば、同章は (A) Die anthropologische Voraussetzungen; (B) Die v.d. Anthropologie geprägte Auferstehungslehre の二節に分けられているが、ことに (A) においてとりあげられている 1) Einheit d. Menschen; 2) Der Tod; 3) Die Bewertung d. Leiblichen という三つの問題が示すように、復活をめぐる異端の論駁、さらにはそれを通しての復活の神学上の基礎づけにおいて、先ずとりあげられ、絶えず問題とされているのは、〈人間とは何か〉であり、特に人間における「身体」(Körper としてではなくまさに Leib としてのそれ) の位置づけだからである。もとよりこれは、Hochscholastik 固有の Problematik ではない。キリスト教の教義の展開に即してみても、古来対内的かつ対外的に最も批判がよせられ異端の根源となったのは身体の復活であり、初代教父以降連綿とその解決が腐心されてきている。そして13世紀は、アリストテレスの再解釈によりこの問題に決定的といってよい結論が与えられた時代であると共に、それによってヨーロッパの人間観の変遷の過程において Ganzheitsanthropologie という伝統が確立したといえてよく、近年論議のかまびすしい身体論の原点とでもいう

べきものが、復活をいかに理解すべきかという問題をめぐる神学上の論争に求められうることを、本章は如実に示してくれる。この意味で本書は、初代教父を中心に、《アルキピアデス》的人間観との対決過程において復活の問題がいかに論及され、またそれを端緒としてキリスト教独自の人間観が形成されるに至ったかを、緻密にフォローした J. Pépin, *Idées grecques sur l'homme et sur Dieu* (1971), ことにその第二部第六章と連続させてみると興味深いものがあるといえる（拙稿「キリスト教的人間観の形成とプラトニズム」—『実存主義』65号参照—）。復活はいうまでもなく秀れて神学上の問題ではあるが、著者が本書第三部第一章 (A) を、*'Theologie ohne Anthropologie ist ein Haus ohne Mauern'* (S.125) という主張で始めていることからもうかがえるように、正当かつ有効な *Anthropologie* の確立をまって、はじめと同章 (B) であげられている 1) *Der Aufweis d. Auferstehung*; 2) *Die Vermehrung d. Seligkeit durch d. Auferstehung*; 3) *Die Identität d. Auferstandenen*; 4) *Die Integrität*; 5) *Die Universalität d. Auferstehung* という古来の復活をめぐる *crux* に一樣ではないにせよ解決が与えられ、それが同部第二章でとりあげられている 1) *Die Übernatürlichkeit u. Natürlichkeit d. Auferstehung*; 2) *Die Ursache d. Auferstehung*; 3) *Zeitpunkt u. Ort*; 4) *Der verklarte Leib* という *Christologie* の領域へと適用され、新たな展開と結実をみせていくと著者は考えているといえるのである。

著者は、*Frühscholastik* ならびに *Hochscholastik* における *Anthropologie* を、*Leib* と *Seele* をそれぞれ固有の *Substanz* とみなす *neuplatonischer Augustinismus*, およびそれと *aristotelisch-thomanische Anthropologie (Ganzheitsanthropologie)* との並存として特色づけている（著者は *neuplatonisch = augustinisch = dualistisch* というシエマを本書の随所においてくり返し用いているが、その際、*neuplatonisch* の具体的歴史的実、またなぜそれがことさら *dualistisch* といえるのか—例えば *Plotinos* についてみても彼と *グノーシス* との関連からしてこのような規定は問題を含む—、さらにはそれを *Augustinismus* に結合さす必然性については自明のこととして十分な論拠は提示されておらず、このような類型化の妥当性は吟味されなければならない）。むろんこの場合、前者の方向においても復活を啓示の真理とする以上、人間はあくまでも *Seele-Leib-Einheit* として把握されており、この点では後者と共通の観点に立脚してはいる。しかし前者の観点は、*<Quare debeatur corporibus*

resurrectio> という問いに答えること、換言すれば復活を単に《Sacra Scriptura》だけではなく、ratioによっても probare するには十分とはいえず、徹底化していくと異端におち入る危険性を持つ。そしてこの点は、トマスによる、著者の表現を用いるならば、アリストテレスの *νοῦς* と *ψυχή* の教説の総合による後者の Psychologie の Anthropologie への変容からする、anima を forma corporis とみる発想により決定的な解決が与えられたと著者はみる (z.B. SS. 143.148.171.343 etc.)。その際著者は、アリストテレス解釈、ことに *νοῦς* のそれに関して全面的に Düring 説に依拠している。しかしこの点は、アリストテレスの《De Anima》の当代に至るまでの解釈上の系譜の検討をふまえた吟味がなされる必要があり、そのうえで著者のいう先の neuplatonisch-augustinisch-dualistisch というシェマがまたあらためて狙上にのぼることになる。ともあれ著者は、このようなトマスの見解が当代の諸家に与えた影響を、公刊・未公刊のテキストを縦横に引用しつつフォローする。なかでも圧巻は、Identität の問題であろう。anima がその essentia からして forma corporis であり appetitus naturalis ad corpus を有する以上、その corpus との reunire は naturaliter であるとする観点が一方では次第に定着化し、ひいてはそこから Triduum においてキリストが homo であるか否かに関する Frühscholastik 以来の論争に共通の解決がなされることにはなっていく。しかしその反面、cruci と sepulcro とにおけるキリストの Leib の Identität の根拠づけをめぐる見解が分かれ、forma corporeitatis を否定しあく迄も人間における forma の単一性を主張しようとするトマスの観点が結果的には少数派にとどまらざるをえなかった過程が巧みに整理されているのである。著者は、Identität の問題に関しても、著者のいうところの neuplatonischer Einfluß が、anima が forma corporis とみなされることにより eingedämmt されていると主張し (S. 343)、その例証として corpus に Realität が付与されていてもそこに forma corporeitatis が要請されていることをあげている。これは、forma ならびに materia の概念が近世以降変容をとげ、Subjektivismus の形成をうながす一つの契機が Hochscholastik における復活理解にあることを示唆しているといつてよく、例えば Heimsoeth の Die sechs großen Themen d. abendländischen Metaphysik 第三章 (Seele u. Außenwelt) にみられる短い素描をより実証的に展開させ、中世哲学と近世哲学とのいわば接点とでもいうべきものを明らかに

するための有効な機会を本書は与えてくれているように筆者には思われるのである。

しかし本書の眼目は、すでにふれたように、Hochscholastikの復活の問題をめぐるの *Darstellung* にあるのではない。著者は、当代において、復活の弁証が *anima* を *forma corporis* とする発想によってのみなされたのではなく、そのいま一つの不可欠の前提として、証明可能の是非に関しては意見が分かれていたとはいえ、*anima* の *Weiterexistenz* (*Fortdauer*) という一致した見解のあったことを力説する。そしてこれをたてに、Barth, Cullmann 等の ‘*heutige protestantische Theologen*’ にみられる *anima* の不滅と *corpus* の復活、ひいてはギリシア的ならびに聖書的人間観とを対立させ、両者を二者択一においてとらえようとする問題意識を鋭く批判する (z.B. S. 125.162.176.—なおこの点に関して、Heinrich v. Gent の «*Quodlib.*» にみられる *Immortalitas* 解釈に関連しつつ、*Unsterblichkeit* と *Fortdauer* とを区別すべきだとする著者の主張は傾聴にあたする—cf. S.160 sq.—)。そしてさらにこれを、著者は、本書の随所で行なわれている Skotus 批判 (とりわけ SS. 179 sqq.) や、彼と Luther との関連づけ (SS. 343 sqq.) からうかがえるように、極端な Fideismus 批判へと敷衍していくのである (cf. S. 21^W 201)。むろんこの場合、著者は、当代において、復活が *Anthropologie* により、換言すれば *per rationem* な方途によってのみ基礎づけられ、またそうあるべきだとみなされていたと考えているわけではない。Skotus 的 *Antiintellektualismus* と全く対蹠的な立場をとったと著者のみる Richard v. Mediavilla ですら、復活に関し <*Investigatione non cognoscitur, sed fide.*> (cf. S. 196) と述べているように、*Anthropologie* をいかに徹底化してみても、そこからだけでは例えば <*Utrum resurrectio sit naturalis*> という問題に答えることは不可能だといってよい (cf. S. 81)。本書全体を通しての著者の観点ならびに究極の意図は、たとえば第Ⅲ部第1章Bの冒頭に <*Fides quaerens intellectum*> (S. 173) がかけられ、また1277年の *Verurteilung* の解釈に示されているように、極端な *Rationalismus* もしくは *Fideismus* のいずれか一方に偏することの不当性を、当代における復活理解に仮託して述べることにあったといえるのである。

本書の根底には、以上のようないわば護教的意図があるとはいえ、単に *Hochscholastik* の枠内にとどまらず、中世哲学の全容にわたる労作といえる。著者は、「人間の問題は、Magnet のようにあらゆる問題をそこにひきつける」(S. 76)、と述べ

ているが、まさに復活の問題にこそ中世哲学の諸問題が集約化されているといっても決して不当ではあるまい。本書は個々の問題についてみても、例えば当代における聖書解釈に対する言及 (SS. 188 sqq.) 等、きわめて興味深い研究を多々含んでいるが、本稿においてふれた以外にも、トマスにおける *anima* の *Weiterexistenz* の解釈 (SS. 146sqq.) が、*esse* と *essentia* との *Realdistinktion* をいわば自明のこととしてなされているなど、必ずしもすべてにわたって説得的ではなく問題を含んでいる。今後、著者自身も自認している *Anhang* に収録されている未刊資料のテキストクリティークの問題はいうまでもなく、言及されている諸問題の個々細部にわたる検討が必要だといえる。なお本書は索引を欠いており、広範にわたる研究であるだけに、せめて人名索引だけでもあればとおしまれてならない。

Martin Bauer : Die Erkenntnislehre und der *conceptus entis* nach vier Spätschriften des Johannes Gerson.

(Verlag Anton Hain·Meisenheim am Glan 1973;
MONOGRAPHIEN ZUR PHILOSOPHISCHEN
FORSCHUNG Bd. 117)

坂 本 堯

1973年、Dr. Martin Bauer は、総ページ519頁に達する上記の学術論文を出版した。著者は西ドイツのケルン大学トマス研究所に所属する学者であって、現在、ドイツにあるアリストテレスの写本研究に当たっている。

著者はこの論文で、J. Gerson (1363-1429) の後期哲学書 *Centilogium de conceptibus*; *Centilogium de causa finali*; *De modis significandi*; *De concordia metaphysicae cum logica* を分析してその認識論や形而上学を明らかにしている。

ところで、ここでは、この中から J. Gerson と Cusanus との関連を明らかにした点を紹介して、この論文の価値を指摘することにした。

まず、“*Centilogium de conceptibus*” においては感覚から表象 (*conceptio*) が形成されるについての J. Gerson の考えが明らかになるが、これが Cusanus のそれと似ているのである。